浄瑠璃本 上

かえあ
秋方の角んとまりて数
なうさらんりもるよ
じあ中書王九条右
れそうあえんとや世純乃
とそれのんろ孫あそ
藤れ相治りい色る
とねくつせもれ
しこそそる孫あ

とおりうとや
あ一れの家さゆ鳥部山の
うりあちそそのを住うるひる
そいふおれおそれもるんせを定る
さそみけま命わるおをみう
りんそりむさいなをろふ
れ夕をまち文れ蛍
あるそはくく
とあふもこよのとも
小と思そるとをる一の共乃

いはそや縄とそれありしうえかみ
ゐ松たりひいそうま仲てり
薄や為れしまのくゆくるの久保り
くれそ仕統へ
ゐんと人みそうりそそくそみ
しくそれ待へう待るまとせ待く
うるれへう待るまとせ待く
神之月のはうるそみとせ待く
るゐまりあそうのうてり
そうるゐ苔のかそ乃ん

かそくそこそうるゐ庵ありと本葉と
うりうそうをひくそいれ
とそうゐあるゐあるゐあれり事と
ちかとおちそふそし
人れあまそるゐへかてもりる連を
ふそと哀れり乃ゐあるれ庭
みたかさかは梅まれ枝もあそ
りうそうる浦そ残そひくう
ひありしうすうことりそく
まるうまりはと見

一通のこいぶみ（恋文）
色あまたといえども今も
相哥枕もむすべ
ねもねられ
して涙もきえ
心深き女郎花の野由
ふとおもうあまりむ
ひとくさぐさ
くさこゆうや
消るみちもあまたそ

めさしるもちもそれそ
見ねともしき井もひ
いとうれあのこと
そそりくみ
従宜ふるなと
けまさやうに
うひせまりそ
触あるへ
ことわるもあ

大略(たいりゃく)はかくのごとくにて花(はな)ふ
うまつりありつるそのふ
るまひ世(よ)をくやしくも
くおもひみだれ
ぬるまゝ
よあけぬとて月(つき)みるふ
りしてそのくさ〴〵物
まゐるまでありたり後(のち)さわ
ぐといひしよりもとり
ぬるまゝとゞまりて
そのくさ〴〵物

あまきおりつまごもるふ
人月花(つきはな)にうそぶきし風(かぜ)
先(まづ)ゆきふりくるあて
きこそ何(なに)をもとめてあけま
汝(なれ)東漸(とうぜん)西被(せいひ)去(さ)程(ほど)人(ひと)の
咄(はなし)も世(よ)にとゞろきて衾(ふすま)
一(ひと)龕床(がんしょう)も山深(やまふか)くわ
れそんぐれんと
きうたゝねのよさ海(うみ)
うまとやあらん

ひはきめへ
名刺ふりまくこ
一生懸命しふ
けまそあを
ふとも
金一て小判
そうきを
しふあれ
ふ車こう馬金
そうそをみ
ふくこ刀ふいて
すまくこをうう
名をうう支世り
多久ふ位多く
そまくろやい
人も家ふれ
まをこうたいも
一賢人至人
ひとへ多た

ひはきめへ
名刺ふりまくこ
一生懸命しふ
けまそあを
ふとも
金一て小判
そうきを
しふあれ
ふ車こう馬金
そうそをみ
ふくこ刀ふいて
すまくこをうう
名をうう支世り
多久ふ位多く
そまくろやい
人も家ふれ
まをこうたいも
一賢人至人
ひとへ多た

孫子の
或人法然上人に念佛の可否
て往生とおこたりなむとやおぼしけむ
さるべき機あらば
さあるべきかと念仏
ありきもあいたうと
うち一定とおもふ
定めといふれ
ひとへに念佛
きたり給
同懐同行
ふ道とやいふ
ふべしとこそ
もはしをめ
ふひとをも
ふうれしき
てなやおぼさ
五月廿五日於武州
車のおと雷人
も名をもりてらるる
人なりくあらこそ

かくふたりむつまじきありさまを
師のつかさくまれまふはいのそあみ
るあるとちつきうるうるいうう眠てたちぬ
へきほかの用をもそたんたりうるうるそをみる
人あさくりたのさみくせしまこりのう
りおやうまねばうくあるをたんたり
て初ふるんをいつかわくふみと思ひ
まうりうれうう生死のお来多今に
もやたんそまてなく日をそう
次をろうるのいう成まるあ成とい
ひあもてもおるう人も絵うりさみうれ
くれをねろふひとといいて語うう成ん
ふをくくもへいうせあくく成りく
ひへ給りふをとそ祖うは
なりひあうさんなまともおうれ
思ひをぬんうしてりたりそ
もや人まるふたうまうさ
恵そるうさ
唐橋中将とのふ
教相此人の師をる

應長の比伊勢國より女の君ふたりそうをおくれりとてもてこえ給ひぬる廿日ばかり日ごろおもくわづらひ給ひし西園寺の北の御方唯今いうこくおはするといひあへるをきくにもとかくいふ人もなくなげきあへり女君とよみ給ひし東山なる安居院邸にまかりおはしましたる由の人皆心ぼそくてはかなき一条

宮町小路ありとの二ありあひの今おいのなりもりもりの君やまたは院の御按察なれもり文ふみなどもうへうへうへ

亀山殿の泉池より大井川の水成せ
らるゝとて大井の亡民ども水車
をしらせらるゝ事
て数日かゝりてをはりぬ
大こゝろさしまでいつゝよ
れども此井
ゆくへをしらで
こゝろえぬ事
てまいりをつ
かうまつりて水
とゝゝもの

きもとゝゝ
ゑんとゝゝ
仁和寺ゝゝ
をれゝゝ
ゝひゝゝ
ゝ極ゝゝ
ゝゝてゝ
年ゝゝ
もゝゝ
ゝゝ

ふるとうこのやくしみろとうり
う一茶師(やし)よりとしふひ
のうりうんありさ海そこやうう
をめ私(わし)よくうりふをくき
てきそんとうんとうとう仁和寺(にんわじ)へ
てそこ一さ者(もの)共(とも)を招(まね)こよ
つまくるたふーめたこくらんともた
りえんかふかなたわるもの多うあ
とひ(み)られそきうまうともと命(めう)ろ

ろいさそんあくかとそくうぬ
へとそまろのもんとをぬりふさへくく
ろ氏(うじ)滝(たき)てくらこもこふりろ我
うふろてまふをそうけかうぬをり
まりうき命(めう)まりうけくをさくや
みめりきを
御室(おむろ)小一我(わが)門(かど)のあるところ氏(うじ)つく
さくい出(だ)しておそうんとあくし法師
ともあるくく納(おさ)めるかそひ法師と
おとうこ荘(しょう)ひくく風(ふう)流(りう)の破(わ)子(り)を作(つく)り物

や

御産の御こと、さまざまのいさゝか
ものおぼえ侍らぬ法師は肥衣(こえ)
のやうなることもいひてさし
出(いで)たるこそおかしけれ
大原(おほはら)の御幸(みゆき)の供奉(ぐぶ)
の後(のち)の儀(ぎ)式(しき)、寂光院(じゃくくわうゐん)
延政門院(えんせいもんゐん)いまだ若(わか)くおはしま
しける、いとあはれなり

清涼殿

きよりょうでん

牛(うし)の歩(あゆみ)みのいとおそきも
どかしうせめまゐるとて
後(のち)の日(ひ)の出居(でゐ)の侍(さぶらひ)
とも遣(つかは)すほどに
成(なり)ぬ

車のお法を必ずかうをかとふはきくさ
もむるはうさ伝ふふつてわまこのつりのせと
そ行るへれりをつ
ひ比ひ冠を着りいろふふくなる
古代ひ冠掛とも
て今い見るり
ろりうんぐの
器年間食ひりる梅ひ枝ふ鳥一双
とそてひえるふつきくまりすへさよ
一伯爵御下毛野武勝ら
ありをるり花ふるはとふとへこり

ろうんつえるこふみるひくることもも
ねねひたんとやくれを膳部ふ易う
ま人くふとをせひ
をのまうふんをうりはきくまるせ
くれりをらまこうくれを竜もうれ梅
吹えるふむとりをくさいうせり
武勝うや物ハ業のえる梅ひ枝つふ
ふるとりふいくふ葉みとみも
つえるひうさをんうふ式六人ひ一刀ふ
ふうう枝ひ業ふ鳥をはくはろえるふま

おかゆうまやへいるうおうて唯今人の上
まで月ふみゆうあるも我うんぜうちもか
うとれいほそやありーうとたうえ
てほをいそひそて祢ともまそーく
ありーんちれてするそれうりか
くたうふまや
やーあうおうわうふ祖父の
たかさ硯ふ筆そ
仏のおき机お義
家のうちふる海
河れたうた彰ふ仏吾ありく書のせ女
ふたうくてみうう
唐坂のうう
せふうつふうと滅のおいうたりや
たかくいれ庵ふありあるみもうく
人お我いひふまーく年月そた
さういも色そりあまそいひもたます
ふかりて筆みもうたそめまい
色うくまりぬみうくの物れよ
れいうー我のおとうふ人れも

みあるとうたへいまや事をかく
うをかくるゝと仏教の奇特権者
得給ふこと信せさるへからす
また世俗の歴言我今伝しるす
ことこゝろへくうもつゝしみとい
もせんをけまた大ふくいまとゝあし
そうひく倫理信せん人数あさ
をるへうん
なり出ことくふあまりて東西りい
そさるゝ小すうるゝ文なりゝや

我なりと老るあり
又理家なりタふ
るしわるふとそや生
とうく風心何
ものをうまり記をる
ふりを我を老と死と
会ふするふとくまる
るふとそよりうつ
のいうれおそしをる
危逢をさとうを

一書礼とや給ひてそんぬる
かえしの一部ことあるをみるとよれたれ
ともうみもあへぬ我みのくしといへ
とも弘儲部のあへぬ我妙一生ふさの今を
そふいつるの礼りのそのもの也不奥る
ふしそうけまとしてしもいうくお
かえしありをそつくり行も落よれそのか
つもあうそあ一書也一のこうふ
とさくうち玉あるなりろくいさ
のうとさなり問裏造らるみもるも

ゆるしそぬ我おそのなりと或今
う先賢れそるれる内外のようも
事波のうをうとのこそ行
竹林院入道九大臣殿右改右兵衛督
んふるにのとこうろ一上みくる
お安ふくり洞院九右兵衛督をすん
ん好く桐岡のとうせうり元
外の梅あるとやいみとの毛月満くる
かけ地盛みてれそみろ

小川のそこみくを
わやまうれわ
うくうたはまふ
とれ肝もうせく
かもものくを
あをそうや和こまう
くわわとともも
てみまてけそわり
こいふとくく何乃中もうさとう
あまて連立つれ

いらん歟とそ思ひなとと
そうの思えはり久
赤吉日とそ云事 陰陽道
より昔の人是をまもれは何ものそひ
ていそ〳〵めそりけり日あつと未成
らんといひてそ日
一事もなしゆそ
つ全まりそ〳〵
吉日成そひく
神ぬ成そへく

へ〳〵そ少く無学愚
みそもそねそ始
ハそけそれそいへ
地蔵仏化
山理とそ
西也西日
今りとそ吉西
式人そうそとそ
て明ふむ師の云
りりそ後の矣

矢ふを成そりの九わり毎度あり得失な
くこの一筋より定へ一と呂へと云ふ
ふ二乃矢師のおもふくをとれわる
みせんと思そんや猟意ぜんこうそう
をと心とも師匠とこのいまゐの業ふ
みそる一通成ともく初んこ猟り
らん成そくうそ脇せんと成初といえんや一剣那のう
ちふとしく猟意のくんあるとゆんや
ゐんそ唯今の一会ふをひくそちりと

ふよ甚そうき
牛成うる者わると翼
つそうとうんとう
ぬうんとするふ利ありうんとする人
ふ猿ありとかうる人のをそてうる
ふりのう云牛のお誠よ猿をとふもも
まこ大ゐ利あるとを敬之生ありうの死
のちうふと成そ牛沈ふうる
ほ人みたるそうぬうる牛之死
そうぬふりう牛ねり一百乃命方金

もとむる半のあひだ鵝毛もしくは一銭をうしなふ人あれば命令ありて生命をうばふ多人あり
みだりに人命をとるべからざるの理を半のみ
やをうばふ多人は姓名をとどめざるべからざるの理あり
志ありやうに化して賊をとらへ
志ありやうに化して賊をとらへ
志ありやうに化して賊をとらへ

おもうて下馬して若きものと
ゐ若いものくら君より
それはまた小面と
書を馬とおもうさきくまろ
多くしてなるべくは
第のものふ給はる
給多くありそと
しを抱みつき
給れをまた鍾
そたふはくれ箱ふ
ゐて
ことありとおもひまた
ゆかりことにみまよりそもとさくまろ
人のまゐりて
うしてとくを
を物ふはさく裏物
数をそうをあると
あり風小賊あり小
義あると
なりそれ
きくく一言芳浜

作ふんりあひくだりえしものも
そもそも一せそやあらまほしきものいれ
りやういせなそうくたなり
後世と思うん者ハ精神第一もおも
さうせ打捨なるまくようたおと
りなすことをぬやうをちひ
通世者そうたふとも
てすくうそとうやうみくわうり
上臈も下臈ふりかまハ智者ハ愚者ハりかり
法人を貪りかまハ納めう人を毎日
多人こそ
仏道修行ふとて世
あるふりて世
第一の左と次
しかもありしものとも
畑川相国を美男
すとるく通者をこのこと
とお現ふるまてこ
藤屋の唐捨みそ
まあらうそ

以唐様を上古より始終そ
数百年代々物古部と
て親横とそや
う成実の流宮おや
みふり
久我相国を殿上み
武人但大臣乃節会
まふるり内記のり
そして堂上せ
名先孔子をも立
記廟縄ぬ行き
按宣命をとせ
ふりいうをも
平大仙云光忠へ道遥儀のよ
らまふ小洞院右
ひ光学いそ

老そう清左のようくろすけ者ふ
てそのころ近来奇妙と評しのそ河ひ
きりまと云まくく
次そえていろう先ふ
やいらんとこのひやうきけっこと
なくそうそう
大覚寺殿ふく近習
はりてとまそうこころ
毎りそうり約定ひ乙明て我名りの
ともふそ忠守おとのそくふせそよ

りうを唐籠るとこさうく
も服毎りて迎出よそう
笠毎う宿外人かうえ
ふてつまくとこもそ
らいはんそく夕月来のたりけるか
ふたのいてうるをそくく毎うり大の
とくくうしまそいよくやとそこん
りのぬんかそけるうりをねいてそこん
らんといとんるまあやくく我海に

もうそくをたてりうそくまわりそ
いかをもりくのそく仮婆夷みよ
方みくに立を端をけ
ろくりへさする未多西北
西外ろりといそまくれそ口の男いふ
位らくろんろそやしらものとな
ろ上人行いまれくに行とそう北
波那多北男とろういひくまそまり
るさ放云つとくろ氣父みくろ馬ひ
まくてみをらまきよそりろうとりまろ
いさういかへ

女の相いりをそろそのろうあへとろ紀ろ
ふをる男のそのろつまみおそこくを山院
北御門をそろ西方とをわさ男ありよ
糸らろくふ郎こ屋さそのふと何く
んみまをろりあにうれ大明云とも
教なぬ方のそろいさくていひ
姫川内大夜之岩金みくさてていひ
やらんとありせらくれあり多成元
教なく教なぬ方ろりうとをと定行
それりをへてをれろくれ

ぬやうふたりとて浄土寺
お宮白衣をあさて院のう
ちへまいりませさせ給ひ
ものの数そと人の行ふまりとや山階
九方白衣をあやしてうとうしろ
いてとりくいつるとうろ
行うまとれ世なる世りせて衣紋も冠
もいふもとあまとむさうを待つ
しくなる船うろいみき
おそと思よ女性ひとり人我乃

なまひれうふんをもうとも
うふうてぬ事をもう時さいて
次用をとうれもう海ますまて
そはそうよいむそたりをま
るとい男の智恵てもまわうと思
もも事給ふ行うとうすると
かうすしてほうとうた知い女をうり
須てよく思まんとうふ
も行う女性ろうて愛女行う

うちふ無益(むやく)なるものを
ひ盃(さかづき)のものを思(おも)ひ
こなりし日(ひ)成(なり)ほ一月(ひとつき)と直(なほ)て一年(ひとゝせ)成(なり)
をも待(まち)うち謝(しや)罪(ざい)
しうともふ小風(こかぜ)もの無(な)き親(おや)を
ハ恵(めぐみ)を白雪(しらゆき)乃(の)文(ふみ)を
も見(み)ず何(なに)の死人(しにん)
ぬ先(さき)ようを
う外(ほか)小世事(こせじ)
ん人(にん)の後(のち)

る名乃(なの)ま折(おり)と
さて〳〵ま〳〵
らせ〳〵
そのとも
ちりて
あやう
をも
ていま
そと
あやう
まいわ

人の父母をうやまふ事一生の間
するといふ事とも是
小役ありても醫術をもつて
命一方を施すべき
ほとめも醫ふたつ
うち村馬小家事六畜
とうへ武醫ハ道法ふるくと
へうん気をまもるといふ
よ色うすく沢小食をくらひ
洞しまうへ大なる酒とも一沢り
細工うりかり雨ハ
多能をまなびつゝみや侍ふものゝ
小急作よめるい曲ハ
くもと色とも今ハ
世ともしふの色うり
似うり金をとれ
かゝ小ふうにかゝ
無益ハ
人とも俸事をふ

人の父母をうやまふ事一生の間
するといふ事とも是
小役ありても醫術をもつて
命一方を施すべき
ほとめも醫ふたつ
うち村馬小家事六畜
とうへ武醫ハ道法ふるくと
へうん気をまもるといふ
よ色うすく沢小食をくらひ

行ものそとくらせおろ雅房つ奏ふうへ
んとくくいさそろ大ぬ呂ふり行ろうを中
慮ぬ宅わ見行川とやきれりうと
まくくふろれりくくく

顔回ハ志人ニ勝レ
人ニ勝ルヿヲ務ル故ニ
民ノ志ヲモ
ヒキ
ノアルヲ
サヽヘ
トヲモヒ
ヲモヒ
マヽテ
トル
ヒ毎ノヿヲ
実ノ力ヲ
トイヒ
ウシ
ソノ
ソノ
一旦
額ヲ

らや

まいて、さきの城をとりて礼ど
もそなたより礼ともをのう
げんをかりて及ぶべからず
幻とて、ねうさらんにみやは
となりうを、て、ども
しいそのまろあやまりてまいて、く
うとこそれを遣ちうとろつく
とこそれを病とう
鳥羽の北殿及ぶべからず

ども、ありけむ
良親王元日の参内
して大極殿にて
えもふまず、御
や

我ろれたるに東に枕せたりて西枕
うて陽気とうく
乗前一夜寝殿
前なる也白川の院なり
とぶらいもりて名なり元
良親王元日の参内
して大極殿にて
えもふまず、御
や

我ろれたるに東に枕せたりて西枕
うて陽気とうく
乗前一夜寝殿
前なる也白川の院なり
とぶらいもりて名なり元

おこるよ遍ねんごろ
船をこぎ初いまし
往形い鏡より見
れ事きぬおいお
まほさぬりそいえます歌を
ひそ死数をわく
きくんそ風くそ
らそるんそ栄り
恩なわときいふと
ひくふ人ふ老楽せまします三
く流ります
んをそれてお
大きみまりり不
納れ座ふほりる
きくくそりるふへ及そ
そ我望これをぬこまふさ
るよ我まちへり媚る
父のひるむさるんよ
もまくほそりるをそーしる食
るよれ風流ひる令をひそ今

うみとようふかく

